

311子ども甲状腺がん裁判記 10

白石 草 (ウェブメディア「OurPlanet-TV」代表)

10代から20代の若者7人が東京電力を提訴した裁判の様子を追います。

30度を超える真夏日となった6月12日。第10回口頭弁論を迎えた東京地裁前には200人近い支援者が集まり、昼過ぎから恒例のリレースピーチが行なわれていた。一方、その喧騒から少し離れた場所で、原告たちはある人物と面会していた。足立修一弁護士だ。

足立弁護士は広島を拠点とする人権派弁護士で、長く被爆者の問題に取り組んできた。在外被爆者問題を皮切りに、救護被爆、被爆二世、原爆症認定と次々に訴訟に参画。政府が「被爆者」として認めない空白を埋めるべく闘ってきた。原告が全面勝訴した「黒い雨」訴訟にも携わり、今は長崎の被爆体験者訴訟に力を注ぐ。4年前に広島県弁護士会会長に就任。春からは日本弁護士連合会副会長として東京で忙しく過ごしている。その合間を縫っての面会だった。

「本当によく提訴を決断したね」

「噛み締めるような声だった。部屋はしんと静まり、箸の音だけが響く。押し黙っている足立弁護士に目をやると、目には涙が滲んでいた。「黒い雨でも原告が立ち上がったのは、70代」

80代になってから。こんなに若いのに、よく覚悟したね」

広島で見えてきた被爆者に対する差別。40年も続く長い闘い。若い原告たちを前に、様々な思いがよぎったのだろう。そっと涙を拭っていた。

甲状腺がん裁判は、「被爆者援護法」のような法律がない中で、被曝と病気との因果関係を立証しなければならぬ。原爆症認定よりもはるかにハードルが高い。原爆症裁判がたどった困難な歴史を、この面会で伝えてよかったのか。

「最後には勝利するという確信をもってもらえたらと思いましたが、しんどくなるような話で終わったかもしれない」

原告を思いやる足立弁護士について、原告の一人はこう漏らした。「私たちのことを思って泣いている感じで、優しい方だと思いました。会えてよかった」。わずかな時間に温かなものが通い合った。



東京地裁前で行なわれた支援者たちによるリレースピーチ。

7人の若者のダイアリー

ゆうた(29歳男性・写真も)

皆さんはi☆Ris(アイリス)というグループをご存じでしょうか。今年で12周年を迎える声優アイドルグループです。

アニメ「プリパラ」にメンバー全員が主要キャストとして出演し、オープニングテーマ曲を担当したことで人気が急上昇しました。



4月、戸田市文化会館で開催されたイベント会場で。メンバーを模した等身大パネル。

今年の5月にはアニメ映画が上映され、9月にはドキュメンタリー映画の公開が予定されており、今絶賛大人気のグループです。ライブでは高い歌唱力とダンスで他のどんなアイドルにも引けを取らないパフォーマンスを披露してくれます。

私はi☆Risのライブやイベントに行っ日々元気をもらっています。どんなに辛いことがあっても彼女たちの歌を聴くと頑張ろうという気持ち湧いてきます。

そんなi☆Risが11月、史上最大の収容人数となる横浜のぴあアリーナMMでデビュー12周年記念ライブを開催します。少し先ですが、どんなステージになるか今から楽しみです。きっと素敵な景色を見せてくれると期待しています。

